

高大接続探究セミナー

原 順 子・三小田 博 昭

(1) 目的

本校はじめ、事業提携校の1・2年生を対象に、管理機関の教養教育院に所属する5名の教員が、双方向性のある「ゼミナール形式」の授業を開講することで、アクティブ・ラーニングネットワーク＝コンソーシアムTOKAIの構築を目指す。大学の学びにいち早く接することで、受験勉強とは異なった「探究的な学び」があることを知る。また、名古屋大学に在籍する学生を、TAとして雇用することで、高校生と大学生が同じ教室で学び合う場を提供する。

(2) 実践内容

1) 対象

WWL採択高校の1・2年生を対象とする。

2) 日時

前半 8月17日(火)、
18日(水) 10:30~12:00、13:00~14:30
後半 8月19日(木)、
20日(金) 10:30~12:00、13:00~14:30

3) 授業形式

「対面授業」で実施。

ラーニングマネジメントシステム「NUCT」を活用
全6講座。

受講生徒は前半1講座、後半1講座を選択。

各講座定員は15人

4) 修了証の発行

4日間2講座を受講した生徒には名古屋大学教養教育院より「修了証」を発行

5) 費用

参加費は無料、ただし損害賠償のついた保険に加入(化学実験受講者は4日間で保険料800円、その他の受講者は同400円)。

6) 服装

制服、私服、どちらでも良い。マスク着用で参加すること。

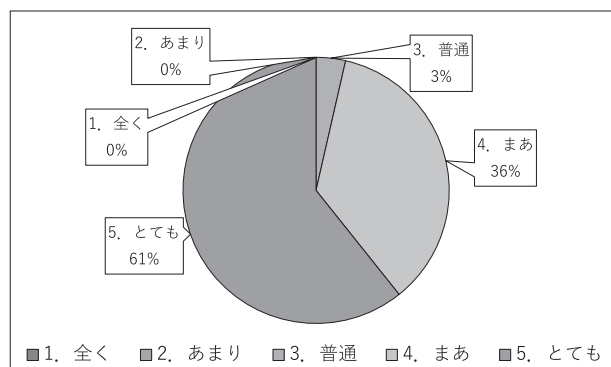
7) 持ち物

筆記用具、保険料、昼食、飲み物、NUCTのID/パスワード

8) 講座一覧

日時	8/17・18日 10:30~12:00・13:00~14:30
講座(1) 松原先生	自分の声を可視化してみよう 全学教育棟本館CALL教室
講座(2) 児玉先生	小論文の書き方 全学教育棟A27
講座(3) 珠玖先生	考える化学実験 全学教育棟化学実験室
日時	8/19・20日 10:30~12:00・13:00~14:40
講座(4) 古泉先生	パソコンで「ことば」を調査してみよう 全学教育棟エースラボ
講座(5) 児玉先生	時事問題で学ぶファシリテーション 全学教育棟A27
講座(6) 山里先生	Pythonでフラクタルを描画しよう 全学教育棟センターラボ

(3) 成果と課題 (振り返りアンケートより)



Q. どのくらい積極的に参加しましたか (上図)。

回答5「とても」の理由 (抜粋)

- ・どちらの講座も魅力的だったので、小論文の課題は自分が納得できるようにきちんと問いを意識して書き、Pythonでは事前に少し予習をしたから。
- ・ほとんどの校外のイベントや講座はオンラインでの実施のため、対面で受講できることは初めてだったので実際に体験できる機会を大切にしたいと思ったから。どの講座も興味深く、高校での勉強にも活かせるよう多くのことを吸収したいと思ったから。

回答4「まあ」の理由 (抜粋)

- ・Taさんや他校の生徒さんにも聞いたりしながら授業に参加出来、6講座ではグループで話し合う機会も

あったので助け合いながら授業に参加出来たからです。

回答3「普通」の理由

- ・講座で指示されたことは行えましたが、自分でさらに応用してみる等は出来なかったため。

Q. 他にどんな講座があったら嬉しいか、の回答（複数回答抜粋）

英語コミュニケーション能力を高めるための講座・歴史や地理分野、人文学科の講座・建築にかかわる講座・ロボットについて学ぶことができる講座・スポーツ科学のような講義・自分が詳しい分野の大学と全く同じ講義・医療に関する講座・工学系の講座・学校の先生を目指している人向けの講義。以上、高校生の大学の学びに対する興味、関心は大きい。

Q. その他振り返り（抜粋）

- ・4日に渡る講義は本当に面白く、TAさんと話しながら学食で昼食をとられたことも、まるで大学生活を体験できたようでした。すごく楽しかったです。
- ・実際に大学に足を運び、大学で講義を聴くということは、コロナ禍ということもあり、大変貴重な経験になりました。また、興味のある分野を掘り下げることができ、非常に有意義でした。このようなイベントを開催してくださり、本当にありがとうございました。
- ・ハイレベルな大学の講義についていけるのか心配だったが、高校生でも理解できるようにわかりやすく説明していただき、高校の学習のモチベーションも上がった。試験のための勉強に留まらず、探求的に学んでいきたい。
- ・高校の学びとつながっていることが実感でき、もっと大学への橋渡しになることをアピールすれば、もっと人気が出てより楽しくなると思います。



まとめ

成果としては、参加者が自己評価でほぼ全員が積極的に参加できたことである。理由は抜粋であげたとおり

で、講師やTAがわかりやすく、質問にも答えてもらい講座を受講できたことが大きい。その他の振り返りと合わせて高評の原因をあげると、「対面」「キャンパスで受講」「他校の生徒と学ぶ」ことで、大学の学びの一端を体験できたことと考える。

課題は、「他にどんな講座があったら嬉しいか、の回答のうち、他のEarly College（例：学びの杜、ALE）で受講できる講座がいくつかあることが知られていないことである。Early College全体の広報をより積極的に行うと、棲み分けが出来、高校生の要望に応えることができる。広報不足という点では、今年度は初めてのことで、教養教育院と拠点校の話し合い、拠点校と連携校の話し合いに時間を要し、受講生募集が遅れた。しかも、会場押さえや講師の先生への連絡は教養教育院に助けていただいた。次年度はスムーズに準備をしていきたい。

本プロジェクトは、遠方の連携校の生徒が受講しやすいように夏休みに行った。2022年度から「基礎セミナー」など、名古屋大学の「正課科目」に事業連携校の高校生を受け入れ、科目等履修生として位置づける予定である。（文責 三小田博昭）